

【課題研究報告】

課題研究Ⅱ AI時代に向けた中等社会系教科の授業づくり

(2020年2月23日開催)

井上昌善
(愛媛大学)

I. 課題研究の趣旨

課題研究Ⅱでは、シンポジウムの議論を受け、より具体的な中等社会系教科の授業づくりの可能性について議論することを目的とした。

発表者として参加されたのは、中学校を主なフィールドとして授業開発に取り組んでいる著者とカリキュラム開発研究に取り組んでおられる岩淵公輔氏(府中第四中学校)、中学校・高等学校をフィールドとして主に地理的分野に関する授業開発研究に取り組んでおられる河合豊明氏(品川女子学院)である。3氏には、①社会系教科を通して育成を目指す資質・能力をどのように捉えているのか、②それを育成するためにはどのような教材開発や授業開発を行えばいいのかという点について、具体的な授業事例をふまえて発表をいただいた。なお、指定討論者には、中原朋生氏(環太平洋大学)と渡部竜也氏(東京学芸大学)にご登壇いただいた。

II. 各提案の概要

1 Agencyの育成を目指す社会科授業開発研究—中学校社会科地理的分野小単元「三津浜安全プロジェクト」を事例として—

井上昌善(愛媛大学)

著者は、AI時代に向けた社会系教科を通して育成する資質・能力を「自ら考え、主体的に行動して、責任をもって社会変革を実現していく力」である「Agency」と捉え、この育成を目指す社会科授業論を、従来の主権者教育の研究成果をふまえて開発した中学校社会科地理的分野の小単元を示すことで提案した。

本提案では、Agency育成のための授業を構想する際には、子ども自身も一人の主権者であり、市民として、社会の変革のプロセスに関わることができる方法や仕組みについて探究する学習過程を組織化することが重要であることが示された。

また、従来の知識を伝達する教師と伝達される子どもという固定化された関係を問い直す学習論を示した本提案は、「社会に開かれた教育課程」の実現を目指す授業開発の視点と方法について示唆を与えるものとなっている。

2 「学習のための評価」を軸とした中学校社会科カリキュラムデザイン—「共創」をキー概念とするカリキュラムマネジメントのなかで—

岩淵公輔(府中第四中学校)

岩淵氏は、AI時代に向けた社会系教科を通して育成する資質・能力に関するキーワードとして、「共創」を掲げ、生徒にとって身近な社会としての学校をより民主的な空間にするためには、社会科を中核とするカリキュラムを通して、民主的な社会のあり方を探究する力の育成を目指す必要があると主張した。そのうえで、「教室を民主的な空間にするための中学校社会科カリキュラムのあり方」について、NCSSカリキュラムスタンダードのストランド(10のテーマ)に基づく中学校社会科のカリキュラムやパフォーマンス評価の具体事例を紹介しながら提案した。

本提案は、民主的な空間の「共創」を目指す社会科のカリキュラムデザインを実現するためには、子どもの変容の見取り(学習評価)をふまえて単元を修正する営みと共に、他教科や他領域の教育活動とのつながりの検討が重要であることを強調したものである。また、「カリキュラムマネジメント」の具体的な方法について、「評価」に基づく授業開発のプロセスをふまえて提案しており、学校現場の課題に応えるものとなっている。

3 地域課題を問いなおす授業の実践—GISの活用を通して—

河合豊明(品川女子学院)

河合氏は、AI時代に向けた社会系教科を通して育成する資質・能力として「行動力・企画発想力」を示し、これを育成することを目指す具体的

な授業を提案した。報告された授業では、実際に発生した災害や環境問題などの社会問題の解決に向けた対策について、GISを活用し、システム思考やデザイン思考を促す学習活動を通して理解を深めさせたうえで、より望ましい対策を探究させることを目指すものであった。本実践の成果として、生徒が主体的に地域活性化のための対策をつくり、外部の人たちに発信するようになったことが報告された。

河合氏の提案は、未解決な問題に対する解決方法を構想させることを重視した学習モデルを、ICTの効果的な活用方法をふまえた授業事例に基づいて示している点で、示唆的なものとなっている。

Ⅲ. 指定討論者からの質問

3氏の提案を受けて、渡部氏と中原氏から主に次の点について質問がなされ、登壇者間で議論が行われた。

1 AIは社会に対してどのような影響をもたらすのか＝AIは、社会をよくするの？悪くするの？（渡部氏より）

渡部氏は、AI時代の社会の捉え方の違いに着目して、AIについては気にすることなく従来の社会科教育学の成果をふまえた授業実践を重視する「超然主義者」＝著者、AIに対して「やや懐疑主義者」＝岩渕氏、AIに対して「無邪気な楽観主義者」＝河合氏というように3氏の立場を明確にした。そのうえで、提案者に「AIが社会にもたらす影響」についての質問を行った。

この質問に対して、著者は「AIが社会に広まったとしても、あくまで社会を形成するのは市民である。その際、効率的な判断を重視する傾向にあるAIに対して、市民にはそれが公正な判断になっているかを確認することがこれまで以上に重要となる」と返答した。岩渕氏からは「AIが普及することに対して、生徒は思いのほかネガティブに受け止めており、教師としての自分は、例えば仮想通貨を学習することで、これまで通貨は国家が創り出していくものという考え方を対象化することができ、社会を創り出していく主体を育成する学習ができるように思う」、河合氏からは「AIの普及に対して、勤務校自体が無邪気な楽観主義者の立場をとっている。AIに関する科学技術を活用するからこそ社会の諸課題がわかってくる。課

題解決のための有効な方法をAIが出してくれるわけではない。有効な方法は人間だからこそ考えることができる」との回答がなされた。

2 育成すべき人間性「育成」の論理をどのように捉えればよいのか（中原氏より）

中原氏は、3氏に対して、①学習評価の在り方を再検討する必要が出てきており、特にAI時代の社会科における人間性「育成」の論理をどのように考えるべきか、②実際に行われているペーパーテストは、スマホなどのAI機能があれば簡単に解答できるものになっていないかという共通する質問を行った。また、著者に対して、初期社会科における問題解決学習との異同について、岩渕氏に対してNCSS社会科カリキュラムスタンダードにおけるテクノロジー項目の日本への位置付けについて、河合氏には、AI技術に潜むプライバシー保護の教材化について質問を行った。

上記の質問の中でも特に①に対して、著者からは「社会的弱者など想定されにくい立場の人々のことをふまえて、公正に判断することができる力」、岩渕氏からは「他者と連携して自分なりの解釈をつくっていく力」、河合氏からは「自分とは全く異なる意見や考えを持つ人に納得してもらうまで説明できる力」を段階的に育成することが重要になるとの回答がなされた。

Ⅳ. フロアの参加者との意見交換・議論と今後の課題—まとめに変えて—

本課題研究では、フロアの参加者同士が意見交換を行う時間を設けることで、多くのご質問・ご意見を頂戴することができた。その中には、「企業・国家によるAIの普及が行われる状況における学校教育の役割とは何か」、「これから求められる主権者とはどのような存在なのか」という質問があった。このような質問が多く挙がったことは、従来の学校現場において実践されてきた社会科の役割を、改めて問い直す必要性が高まっていることを意味している。

「AIが普及する社会になっていくからこそ社会系教科を通して育成すべきコンピテンシーとは何か」という問いについて、教師自身が向き合い、コンピテンシーベースの授業開発に関する議論を活発に展開していくことが、AIに打ち克つために必要な営みであり課題ではなかるうか。